



Title	go visiting NP' 構造
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 85-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

'go visiting NP' 構造

上野義和

Clare M. Silva の 'ADVERBIAL-ING' (1975, *LI* 6, pp.346-350) は興味深い論文である。わずか数頁の小論ながら、その主張することの多くは説得力があり、また示唆するところも多い。以下において、

- (ア) Silva の主張の主要点の整理
- (イ) 一つの新しい意味論上の提案
- (ウ) Silva の主張の唯一の例外的用法の 'go visiting NP' の分析

の三点について論じてみたい。

— I —

まず、(ア)について述べる。

(1) I'm going fishing.

(1)におけるように、この構造の中核となる動詞の代表は 'go' であるが、次のように他の移動動詞¹の使用も可能である。

- (2) Jane said she would $\left\{ \begin{matrix} come \\ go \end{matrix} \right\}$ fishing with us.
- (3) Can we $\left\{ \begin{matrix} take \\ carry \end{matrix} \right\}$ Harry camping next week ?
- (4) He always carries that same knife hunting with him.

上野義和

‘do so’ 変形をかけてみると、次のような結果

(5) John went fishing and I did so $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{too} \\ * \text{hunting} \end{smallmatrix} \right\}$.

(6) He took a friend skiing and I did so $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{too} \\ * \text{skating} \end{smallmatrix} \right\}$.

が得られることから、この ‘-ing’ は統語論的には、「動詞句内の一要素」と考えることができる。次に、その「一要素」とは統語的には何であるかが問題となるが、動詞でもなく（前置する要素の *go*, *come* などが動詞であることから明白）、また次のように

(7) * $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{What} \\ \text{Which} \end{smallmatrix} \right\}$ (fishing) are you going tomorrow ?

‘What’ や ‘Which’ で疑問詞化できないこと、および

(8) * We want to go hunting, but John doesn't want to go

$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{it} \\ \text{that} \\ \text{one} \end{smallmatrix} \right\}$.

のように ‘it’, ‘that’, ‘one’ などで代名詞化もできない、また(9)のように

(9) * We're going $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{our fishing} \\ \text{some fishing} \\ \text{good fishing} \\ \text{fishing that lasts all day} \end{smallmatrix} \right\}$.

名詞修飾語（句）(*our*, *some*, *good*, *that last all day*) によって修飾されることができない、という結果から、この ‘-ing’ は名詞（相当語）ではありえないことがわかる。以上のことから、この ‘-ing’ は結局、「副

‘go visiting NP’ 構造

詞（的機能を果たすもの）」ということになり、事実

(10) Where are you $\left\{ \begin{array}{l} \text{going} \\ \text{taking him} \end{array} \right\}$? $\left\{ \begin{array}{l} \text{Downtown} \\ \text{Fishing} \end{array} \right\}$.

上記(10)におけるように疑問副詞 ‘Where’ の答えとして生じうる。

以上のように、Silva は ‘go / come / take / bring / carry + V-ing’ 構造の ‘V-ing’ は統語的には「副詞」と結論づけているが、この見方に間違いはなかろうと思われる。

次に ‘V-ing’ の意味的特性にうつる。Silva によると、‘V-ing’ の ‘V’ がもつ意味は

- (a) その行動が「娯楽的 (recreational)」なもの
- (b) その行動が「肉体を使う (physical)」もの
- (c) ゲームがもつ規則のようなものにあまりしばられない行動
- (d) その行動が場所の移動を意味するもの

の 4 つを満たさなければならない。たとえば

(11) * He's going $\left\{ \begin{array}{l} \text{working} \\ \text{teaching} \\ \text{farming} \end{array} \right\}$.

(11)の「仕事」、「教授」、「農作業」、は(a)の条件に違反するし、また、次の(12)における

(12) * She went $\left\{ \begin{array}{l} \text{puzzle solving} \\ \text{day-dreaming} \\ \text{meditating} \end{array} \right\}$.

「パズルの解決」、「白昼夢を見ること」、「黙考すること」は(b)の条件に合わない。同様に、以下の(13)

- (13) * Let's go {racing
polo-playing} .

は条件(c)に抵触する。

これまで 'V-ing' が成立するために必要な三条件を概観したが、それら三条件の相互関係はどうなっているのか、ということが誰しも頭にうかぶ疑問ではないだろうか。つまり、「V-ing」は三条件をすべて満足させねばならないものか、それとも三条件うちどれか一つだけを満たすだけでよいのか、ということである。結論から言えば、大変複雑である。たとえば、前出(11)は(a)にのみ抵触しているだけで(b)、(c)には抵触していない。また、(12)は(a)、(b)二つに抵触しているが、(c)とは無縁のものである。成立条件抵触に関して例文(11)、(12)に共通しているのは、(11)、(12)とも条件(a)に抵触しているという事実である。ということは、「V-ing」が成立するためには、必ずしも三条件を同時に満足させる必要はない、ということに等しい。が、条件(a)は必須条件になるのではないか、という推測も同時に成り立つように思われる。事実、母国語話者によると、この推測は正しいと考えてよさそうである。次の例をみてみよう。

- (14) He went horse-riding.
(15) He went to ride a horse.

「彼は乗馬に出かけた」という意味では両者は等しいが、「気晴らし」のための乗馬を意味する場合には(14)は正文で(15)は非文になるそうである。(15)の主語の 'He' が「乗馬を気晴らし」としない人、たとえば、乗馬を職業とする人（騎手など）を指すならば、(15)は正文となることになる。Silva はこの件に全く触れていないが、以上のことから、次のような規則が必要と考えられる。

'go visiting NP' 構造

規則1：‘V-ing’ が成立するためには、まず第一に(a)の条件を満たさなければならない。

Silva が触れていない条件がまだ存在する。たとえば、次のように

(16) * He went $\left\{ \begin{array}{l} \text{calling in} \\ \text{popping in shops} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} \text{on friends} \\ \text{at shops} \end{array} \right\}$.

‘Call in on / at’、‘pop in’ のように「ふらっと立寄る」のように、
「明確な目的をもたない行動」は ‘V-ing’ になる資格を欠くことがわかる。
従って、次のような条件が必要となる。

条件(e)：思いつきの行動を表す ‘V’ は ‘V-ing’ の形をとれない。

— II —

Silva が作った ‘V-ing’ の具体例のリストは次のようなものである。

(a)	dancing	boating	bowling ²
	skiing	rowing	sight-seeing
	skating	canoeing	caroling
	hiking	sailing	Halloweening ³
	jogging	caving	visiting
	cycling	camping	calling [=visiting]
	riding	swimming	
(b)	fishing	clamming	shopping

上野義和

hunting	mushrooming
nutting	berrying

(c) water-skiing	duck hunting
trout-fishing	ice-skating
deep sea fishing	motorcycling

これら三つの分類は、(a)は単一語、(b)は「物を探して手に入れようとする行動」、(c)は複合語を基準にしただけのもので、大した意味はない。それよりも我々が注意しなければいけないことは、これらすべての ‘V-ing’ 形が I で述べた条件(d)と結びついているということである。たとえば、‘jogging’ や ‘swimming’ などはそれ自体が「場所の移動」を表しているから理解しやすいが、次のような

- (17) They went *caroling* in the town.
(18) He went *caving*.

(17)、(18)は誤解を生じさせやすい。‘carol’ は「祝歌を歌う」が本義であるけれども、(17)のように移動動詞と共に起し、かつ条件(d)を満たす意味は

- (19) 彼らは祝歌を歌いながら町中をねり歩きに出かけた。

のように、「場所の移動」を表すものでなければならない。同様に、(18)は

(20) 彼は洞窟探検に行った。

のように、「洞窟の中をあちこち移動する」行動をイメージしなければならない。

'go visiting NP' 構造

- (21) He went fishing in the river.
- (22) She went shopping in the department store.

(21)、(22)でも、決して一ヶ所で魚を釣る、買物をするイメージを抱いてはいけない。各々、川岸で場所を変えながら釣りをする、デパート内であちこち移動しながら買物をする、と解釈しなければならない。

Berman (1973, 403)⁴ が次の二文

- (23) He's going wenching.
- (24) *He's going screwing.

の正文と非文の違いを説明できなかったのも、まさしくこの条件(d)に気づかなかったためである。「wench」、「screw」とも「性行為」という点で同じような意味を持ってはいるものの、前者には「場所の移動」の意味があるが後者にはないことは英々辞典を少しみてみれば明らかになる。

wrench² old use to have sex with many
women, such as PROSTITUTEs
screw 6b (esp. of a man) to have sex
with (someone) (LDCE)⁵

‘wench’ の ‘many women’ が「あちこちの場所への移動」を示唆する一方、「screw」の定義は「性行為をする」ことそれ自体を表わしており、そこには「場所移動」の含みは全くない。

— III —

‘V-ing’ 形には、I で述べた以外の別の統語的特徴がある。次のように、同一形で自動詞、他動詞の両方に用いられる

(25) Jake is sailing $\left\{ \begin{array}{l} \text{catamarans} \\ \text{in a catamaran} \end{array} \right\}$ tonight.

(26) She is hunting $\left\{ \begin{array}{l} \text{bear} \\ \text{for bears} \end{array} \right\}$.

‘sail’、‘hunt’が‘go V-ing’の‘V’として生ずると、

(27) Jake would go sailing $\left\{ \begin{array}{l} * \text{catamarans} \\ \text{in a catamaran} \end{array} \right\}$.

(28) Sue's gone hunting $\left\{ \begin{array}{l} * \text{bear} \\ \text{for bears} \end{array} \right\}$.

(27)、(28)にみられるように、自動詞用法のみ許され、他動詞用法は許されないことがわかる⁶。この制限は同種の他のすべての動詞にもあてはまるが、Silvaは唯一の例外として次の文を脚注に載せている。

(29) I'm going to go visiting $\left\{ \begin{array}{l} \text{sick friends} \\ \text{relatives} \\ \text{old classmates} \end{array} \right\}$.

つまり、‘visit’だけが‘go V-ing’形に他動詞として生ずることができるということである。その理由は何か？Silva自身が何も答えてはいない以上、その理由を探求するのは読者の役目だろう。

まず、(25)～(28)から言えることは、‘sail’、‘hunt’などの両面動詞(double-sided verb)が目的語を支配する時、同じ意味を表すために「自動詞は必ず前置詞の助けを借りなければならない」ということである。換言すると、‘hunt (vt) = hunt(vi)+for’、‘sail(vt)=sail(vi)+in’という等式が成立することである。ということは、逆に言えば‘visit’の場合にはそのような等式が成立しないということになるのではないか、という推論が出てくる。そこで、‘visit’が自動詞として機能する時に共起しうる前置詞を色々な辞典、辞書で調べてみると、次のような結果が出てくる。

'go visiting NP' 構造

- (30) visit $\left\{ \begin{array}{l} \text{at a farm (視察する)} \\ \text{at a hotel (滞在する)} \\ \text{in the country (訪れる)} \\ \text{with (米) a friend (おしゃべりする)} \end{array} \right.$

(30)から明らかなように、(29)の 'go visiting sick friends / relatives / old classmates' のように、「人を表わす名詞」が生ずるのは、唯一 'with' の時のみだが、その意味は「訪れる」ではなくて「おしゃべりする」になってしまう。(29)の 'visit' が持つ「訪れる」の意味はそこにはないものである。つまり、「人を訪れる」の意味を持つ自動詞の visit が共起する適切な前置詞は存在しないということである。これこそが(29)のような例外的用法を生み出した原因ではないかと思われる。この推論が正しいものであろうことを裏づける証拠として、次の(31)

- (31) I'm going to go calling on $\left\{ \begin{array}{l} \text{sick friends} \\ \text{relatives} \\ \text{old classmates} \end{array} \right\}$.

が、理論上⁷は正文であることあげることができる。

— IV —

最後に蛇足ながら(29)についてひと言つけ加えおく。(29)は許されるが、次の(32)

- (32) * I'm going to go visiting $\left\{ \begin{array}{l} \text{a sick friend} \\ \text{a relative} \\ \text{an old classmate} \end{array} \right\}$.

が許されないのは、成立条件(d)が関与しているからであって、(17)～(24)で観察したように、「go V-ing」の 'V' は常に「場所の移動」を表わすのだから、「go visiting + 複数名詞⁸」の形は「訪問してまわる」の意味をもつものであることを忘れてはならない。また、「sick friends」(病人の友人)

上野義和

の見舞いが「娯楽」なのか、という問い合わせに対しては、「go V-ing」形の‘V’が成立条件(a)の「娯楽であること」を第一条件として満たさねばならない以上、病人の見舞いであっても娯楽、楽しみ、気晴らしという概念でとらえられる範囲の見舞いであると考えねばならない、と答えざるをえない。

〈注〉

1. Silva は ‘deictic verbs of motion’ と呼んでいるが、

I'll	{ come * go bring it * take it carry it }	to you.
I'll	{ * come go * bring it take it carry it }	to him.

以上の結果からみて、‘carry’ が ‘deictic verb’ でないことは明らかなので、‘移動動詞’ という用語を使うことにする。

2. ‘bowling’ には細かいルールがあるが、それはあくまで今日そうであるだけで、‘go bowling’ という表現が生まれた当時は、これといった細かい規則がなかったらしい (Silva の脚注参照)。‘go golfing’ についても同様と考えられる。
3. この表現については知っている母国語話者とそうでない母国語話者がいる。前者によると、その意味は Halloween の日にマスクをつけて家々を訪れてまわり、‘trick or treat’ と言う行動をさす。
4. ‘TRIPL-ING’, LI IV.
5. *Longman Dictionary of Contemporary English* (1978) のこと。
6. 現実にはどちらの用法も容認可能であり、むしろ両者には意味の違いがあるようである。たとえば、(28)で、‘go hunting bear’ は「単なるクマ狩り」を、‘go

‘go visiting NP’ 構造

‘hunting for bears’ は「食料としてクマ狩りをする」の差があるという。また、アメリカ人によっては後者は使わず、すべて前者の用法（つまり、他動詞用法）が普通だという人もいる。

7. (29)と(31)では、母国語話者はちゅうちょなく(29)を選ぶ。ただ、これは使用頻度と定着度の問題と考えられ、(31)が逆の立場になっていた可能性もある。従って多くの母国語話者は(31)は実際には使わないが理屈は通っているという。
8. 複数名詞のみに限らず、複数の概念を持つ名詞 (e.g. everyone) でもよい。

